

社会的養護の新展開 11

—戦争と子どもたち—

浦田 雅夫
京都芸術大学

戦争が終わって75年。戦争体験者から話を伺う機会も限られている。そう思っていたとき、中日新聞（2020年8月14日付）に掲載されていた武田倫江さんの記事に心を奪われた。そこで、早速、武田に連絡をし、無理なお願いをして、滋賀県長浜市のご自宅を訪ねた。

小学校時代、無意識に戦争は正しいと思っていたという武田さん。授業のときに書いたという絵や作文を拝見しながらお話をうかがった。



「子どもだからね、やっぱり先生に褒められたいというのもあるし、褒められるのよね。日丸をしっかりと書いて、戦っている絵を描いたら。」

絵の裏からたまたま見つかった作文には、こんなことが書いてあった。小学2年生のときに書かれたものだ。

いまは、だいとうあせんそうです。だいとうあせんそうは、だんだんはげしくなります。そして、日本がますます、かちます。工兵たちは、冬でも春でも夏でも、秋でも、海や川へはまって橋をかけたり、とうちかをこしらへたりして、はたらいてくださいます。き兵は馬にのって、せんそうをして、くださいます。ほんとうに、ありがたいことです。私は、小さいときから、兵たいさんが大すきです。

「子どもはね、純粹だからね。言われたら、それが正しいと思ってね、従うのよ。」
「だって、みんな、お国のためにがんばっているんだから。そんなふうに思っていたの。」



「戦争中はね、食べるものがほんとうになかったの。お弁当を持って行くのだけど、粗末なもの。週に何日かは、日の丸弁当の日もあったわ。そういえば、いま、思い出したけど、お弁当の時間になったら運動場へ走って出て行く子がいたわ。きっと、お弁当を持ってこられなかったのだろうね。ひもじい思いをしたのだね。」

私が、現代の社会的養護のお話を少しさせていただくと、武田さんは、長浜駅に集まっていた戦災孤児たちについて語られた。

「戦争が終わってね、負けるわけがないと思っていたのに、負けてね。何もかもがひっくりかえってね。親を亡くした子どもたちもいっぱいいたの。ぼろぼろの服を着てね、駅に集まっていたね、それはそれはかわいそうな格好をしていたの。昔は野犬狩りというてね、そんな孤児たちをトラックに乗せて施設に連れて行ってね、でも、また逃げて駅に帰ってくる子どもいたみたいよ。孤児の子どもには何にも責任もない。ほんとうにかわいそうだった。」

もう 75 年も昔の話。まだ 75 年前の話。物心ある当時の子どもたちは、もう 80 歳以上。記憶を記録にとどめて、次に伝えないといけないという思いが強くなった。